

田中允編

未刊謡曲集

十五

古典文庫

田中允編

朱刊謡曲集

十五

古典文庫

古典文庫第二七一冊 ©

昭和四十五年一月二十日印刷発行

非売品

編者 田中 允

発行者 吉田 幸一

集曲謡刊未
十五

印刷者 東京都板橋区熊野町三四
帝都印刷製本株式会社

発行所

114
東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

凡例	五
伝本略称略解	七
各曲解題	九
本文	
八塩	(九) 二五
康頼	(九) 二七
矢田寺	(一〇) 三三
柳瀬	(一〇) 三五
柳陰	(一〇) 三九
柳刀	(一一) 四三

矢 矯……………(二)……………哭

矢 彦……………(二)……………三

山家翁……………(二)……………五

山 口……………(二)……………六

山崎猩々……………(二)……………六

維摩居士(維摩)……………(三)……………六

遊蒼上人……………(三)……………七

幽靈清重……………(三)……………七

幽靈信夫(信夫・信夫の太郎・信夫影利?)……………(三)……………七

雪 猩々……………(四)……………七

雪比丘尼……………(四)……………八

雪頼朝(雪?) 異本……………(四)……………八

夢……………(五)……………九

夢 一字(夢) 異本……………(六)……………九

横川坊		(一七)	一〇〇
欲 闇		(一七)	一〇四
義 貞 (足羽川)		(一七)	一〇七
義 朝		(一七)	一二三
吉野桜 (八重桜・役行者)		(一八)	一二九
吉野三位異本		(一九)	一二四
吉野天狗		(一九)	一二七
吉野判官		(二〇)	一三〇
頼 方		(二〇)	一三四
寄辺水 (桑露杉) 異本		(二〇)	一三六
頼 豪		(二一)	一四一
蘭奢待		(二一)	一四五
竜 松		(二三)	一四九
竜門寺		(二三)	一五一

瑠璃君		(三)	一五四
靈昭女		(三)	一五六
臚女		(三)	一六四
六阿弥陀		(三)	一六九
六波羅		(三)	一七一
論議狐		(三)	一七四
和歌天神		(三)	一七六
和銅(和銅錢?)		(四)	一八一
仙台本番外謡曲解題			一八七
追記・訂正			二二三

凡 例

- 一、第十四冊に引続き、発音別五十音順に並べた仙台本第一種の未刊曲のうち、「八塩」から最後の「和銅」までの四十二番を収めた。
- 一、翻刻はすべて原本通りにし、私意を加えた所はすべて（ ）でくくった。
- 一、原本には段落はないが、編者の見識で改行した。
- 一、異本との校合は特に注意すべき所だけにしぼった。
- 一、節附は印刷の都合上省略した。
- 一、「次第」「舞」などの演出上の重要記号は出来るだけ残したが、打切を意味する「打」間拍子を意味する「ヤ」「ヤハ」地拍子を意味する「トル」「ヲクリ」などの特殊記号は省略した。
- 一、「印は必ずしも原本に固執せず、詞のところ（節附のないところ）は「節のところ（節附のあるところ）は、を付けて区別した。原本は「のみで、はなく、「もない場合が多い。

一、句読点は原則として原本通りにしたが、元来句読点は節譜の一種であつて、韻文の切れ目とは必ずしも一致しないから、韻文（節附のある部分）の拍子合はずの所は七五調を基本とする一節を一句と考え、拍子合いの所は八拍子を基本とする一区切を一句と考え、これらの区切のところに句読点のない場合はそれぞれ一字分空白にした。しかし原本は節附が粗雑で間拍子や地拍子の補助記号を脱している場合がしばしばなので、どこが八拍子一節の切れ目か判定に苦しむ場合に時々出合つた。その場合異本があればそれが参考になつたが、異本のない場合、異本があつてもよくわからない場合などは、自信なく空白を設けたこともある。

一、濁点は、原本にはめつたになく、異本を参考にして補つた場合、編者の見識で補つた場合などがあるが、清濁いづれが不明の場合はそのままにしたところもある。

一、曲名の下に数字は、底本の巻序を示した。六4は六の組の第四冊、単に2は無印組の第二冊の意。

伝本略称略解

各曲解題に見える伝本の略称の略解で、その下に示した洋数字は、未刊謡曲集のナンバーで、そのナンバーの未刊謡曲集にそれぞれの解題が見えることを示す。(五十

音順)

朝12	朝日本第一種・第二種	2	京2	京大本第二種	1
井1	井上本第一種	1	元	元文写本	1
石	石田本	1	国15	国学院本第一種・第五種	1
上	上杉本	1	佐	佐野本	1
江	江崎本	1	斎	斎藤本	1
川	川瀬本	2	柴	柴田本	1
観	観世本	9	島	島原松平本	2
吉	吉川本	1	下	下村本	1

仙13	仙台本第一種(底本)・第三種	15
田	田安本	1
大	大聖寺本	1
田下	田中下懸本	1
谷	谷村本	12
内	内閣本	11
能	能勢本	1
樋口	樋口本(第一—三冊の底本)	12
松	松平本	1
毛	毛利本	1
吉田	吉田本(第三—七冊の底本)	3
米12	米沢本第一種・第三種	6
柳	柳洞本	12

各曲解題

八塩（やしほ）名寄にも見えない珍曲。古今集や新勅撰集などから桜に関する古歌を多少違えながら取っているが、文辞脚色共に拙。八塩と題する根拠も不明瞭。近世の和歌好きの好事家の戯作であろう。貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄に「やしほの岡」という曲が見え、国附を諸名寄皆大和としているのが不審であるが、これは京都北郊の紅葉の名所八塩の岡に取材した別曲であろう。

康頼（やすより）〔下・川・上・吉・田・朝1〕石田本笛手附に笛の頭附が見え、いろは作者註文以下多くの名寄類に見える。古今謡曲解題には卒都婆流（未刊謡曲集二所収）の別名を康頼としているが、卒都婆流の別名を康頼とした資料はまだ管見に入らないから、これら名寄類の康頼は大むね本曲を指すと見てよからう。笛の頭附もあり、伝本も多く、俊寛や平家物語を巧みにこなして文辞脚色も比較的にとのっているから、室町中期か末期頃の古作であろう。朝1は未対校だが、他の諸本は吉・田が殆ど同文であり、他の諸本間にも大異はない。

矢田寺（やたでら）名寄にも見えない珍曲だが、文辞脚色共に拙。矢田寺地蔵の縁起を語り、その功德をほめたたえた語り物式の曲で、矢田地蔵のPRを兼ねた近世好事家の戯作であろう。

柳瀬（やながせ）〔下・吉〕下村本内題にヤナガセと傍訓。吉田名寄・江崎本遠キ諷組に見えるのみ。豊公物の謡曲の一つで、秀吉が信長に忠勤を励み、逆臣明智光秀を討ったことをクリ・サシ・クセでPRし、信長の幼君をないがしろにした柴田勝家をも逆徒として、その先陣の大將佐久間玄蕃を討つという構想であるから、一連の豊公物同様、秀吉をほめたたえた曲である。したがって徳川が天下を取ったよりも前の作か、または豊臣びいきの誰かが徳川をはばかりながら作った曲であろう。

柳陰（やなぎかげ）名寄にも見えない珍曲。古今集に見える遍昭の「あさみどり……」の歌にかけて西大寺の来歴を述べた曲だが、文辞も拙で、クセなどは八拍子に割り付け困難な拙い作曲となつて居り、「そびく」といった近世語も見える。近世の戯作であろう。

柳刀（やなぎがたなぐりうたう）名寄にも見えない珍曲。リウタウと読むかも知れない。文辞脚色共に拙。近世の戯作であろう。

矢矯（やばせ）吉田名寄・江崎本遠キ諷組・謡銘寄（能楽研究所蔵、黒川真頼旧蔵本）などに散見するのみ。文辞拙にて冗漫。近世の作であろう。

矢彦（やひこ）名寄にも見えない珍曲。極めて短篇。越後弥彦神社の宝物PR作品。近世の戯作であろう。

山家翁（やまがのおきな）〔下・田〕下村本内題に「ヤマガノ」と傍訓し、山家の左にサンカトモと註して居り、下村本本文にも「山家」にヤマガと訓じているから、通例ヤマガノオキナであり、サンカノオキナとも呼ばれたこともあったと思われる。吉田名寄（山家之翁とあり）・松尾名寄に見えるのみ。文辞脚色共に比較的とのつてはいるが、キリの舞楽のところは白楽天の詞章を借用して居て、白楽天は海だから「鼓は浪の音、笛は竜の吟ずる声」でよいが、奥山を舞台にした本曲にはこの詞章では面白くない。近世初期頃の隠逸者流の試作か。

山口（やまぐち）名寄にも見えない珍曲。近世の戯作であろう。

山崎猩々(やまざきしやうじやう)〔吉・内・柳〕吉田名寄・江崎本遠キ諷組に見えるのみ。狂言集成所収大瓶猩々の間狂言に「猩々の間にて、左の分、皆常の猩々間にて相済む」と註し、その左の分の中に山崎猩々も見える。文辞脚色共に一応ととのつて居り、近世初期頃の作か。

維摩居士(ゆゑまこじ)別名：維摩〔田・下〕下村本外題は「維摩」内題は「維摩居士」。下村・田安本は同文だが、底本とはかなり異り、底本の方が整理洗練されたように見受けられる。天竺の維摩居士が日本の志賀に來り、禪僧と禪の教義を語り合うという禪のPR曲で、構想は白樂天に似たところがある。吉田名寄・松尾名寄に見えるのみ。戦国時代か近世初期頃の作か。

遊誉上人(いうよしやうにん)ユオシャウニンと読むかも知れない。名寄にも見えない短篇珍曲だが、文辞脚色共に稚拙。近世の戯作であろう。遊誉上人も現れず、曲名の由来も不明。

幽霊清重(いうれいきよしげ)〔佐・田・下〕佐・田・下はほぼ同文だが、底本のみは小異。吉田名寄・江崎本遠キ諷組に見えるのみ。サシには敦盛・安宅、クセの

始めには吉野静、キリには簾のそれぞれ詞章を利用しているが、安宅の原文は「ある時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪のうちに」とあるのを「又或時は野山海岸の山脊、馬蹄雪の中にも伏給ひ」と意味の通じない盗用をして居り、名ある作家の作とは考え難い。近世の戯作よりはやや見るべき所がある程度の曲で、あまり古い作品ではあるまい。

幽霊信夫（いうれいしのぶ）別名：信夫・信夫の太郎・信夫景利？「元・大・毛・田・上・仙3」元・上・仙3は信夫とあり、元は別名を信夫景利としているが、古今謡曲解題は信夫景時の誤であろうとしている。信夫という曲は他にも謡曲叢書所収本があり、これは嶋信夫・松崎・現在信夫とも別称され、信夫の太郎・次郎兄弟が人買にだまされたことを扱った曲で全く別曲である。舞芸六輪に「しのぶの太郎。前、男。大口、水衣。後、かつちう、はつび、袖なし。脇、僧二人計」とある「信夫の太郎」は幽霊信夫即ち本曲と見るべく、自家伝抄古注之作者能之注文の条には「垣衣太郎（しのぶの太郎）」を禪鳳作（異本は観阿弥・官増などであるが禪鳳が正しいらしい）としている。鴻山文庫本「能出入」に演出の見える

「信夫」は現在信夫の方であるから、能本作者註文系諸本に作者不明とある信夫や運歩色葉集に「忍能名」とあるのなどは両者の中のどちらとも決し難い。底本と仙3は殆ど同文だが、田・大・毛・上(元は焼失未見)は底本とは大異。底本系には脱漏改変があるらしいことは本文中に指摘した。田安本系は異本として後日繙刻の予定。本曲が禪鳳作かどうかは軽々しくは決められないが、以上の資料から見て、室町期の古作であって、上演されたこともあったと思われる。

雪猩々(ゆきしやうじやう)〔佐・吉・田・下〕吉田名寄に見えるのみだが、狂言集成所収大瓶猩々の間狂言の所に「猩々の間にて、左の分、皆常の猩々間にて相済む」と註記のあるその左の分の中に雪猩々が入っている。文辞脚色共に比較的とのっている。近世初期頃の作か。

雪比丘尼(ゆきびくに)名寄にも見えない珍曲。文辞脚色共に拙。賤業者比丘尼を主題としたところも近世的であり、近世の戯作であろう。

雪頼朝異本(ゆきよりとも)別名：雪？〔樋口・元・能・井1・吉田・柴・国1・観・朝2・島・仙3・上・毛・宝山寺蔵金春炭蓮自筆本(善四郎本享)・吉・田・下〕右の中、